九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「サン＝ベルナール書簡集」《corpus epistolarum》に関して : 新しいサン＝ベルナール像を求めて（二）

中軽米, 明子

https://doi.org/10.15017/1866572

出版情報：史淵. 136, pp.57-78, 1999-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

史料紹介

『サン＝ベルナール書簡集』《corpus epistolarum》に関して

―新しいサン＝ベルナール像を求めて―（二）

中軽米　明子

三、《corpus epistolarum》の構成

以上のことから、今日我々の目に触れることができる『サン＝ベルナール書簡集』の構成には、サン＝ベルナール以外の多くの人々、同時代及び後世の編纂者たち、マビヨン、ルクレールに至る多くの刊行者たちの何らかの意図、あるいは主観が入り込んでいるといえる。とはいえ我々は、ルクレールの詳細なマニュスクリ研究のおかげで、サン＝ベルナールが編纂に関与した『書簡集』そのもの、ないしはそれをもとに彼の直接の弟子が編纂した『書簡集』に近いものを容易に手にすることができるのである。彼の実像に近づくべく、ルクレール版をもとにこの『書簡集』の構成を明らかにしてみたい。

書簡は、一一二〇年代のものに始まり、ほぼ年代順に並んでおり、この年代的枠組みの中で、テーマ別あるい

は事件別に分けられている。一見大雑把なクロノロジー的側面に関し、サン＝ベルナールが特に注意を払ったと思われる要素は、教皇在位期である。書簡は、教皇ホノリウス二世の在位期（Honorius II、一一二四―一一三〇年）、アナクレトゥスのシスマ期（一一三〇―一一三九年）、教皇インノケンティウス二世の在位期（Innocentius II、一一三〇―一一四三年）、ケレスティヌス二世の在位期（Coelestinus II、一一四三―一一四四年）、エウゲニウス三世の在位期（Eugenius III 一一四五―一一五三年）に属するものごとに順にまとめられているからである。[1]

このことに関して一つの興味深い事実が存在する。サン＝ベルナールが最も熱心に介入した事件の中にヨーク司教選挙事件（一一四四―一一四七年）があるが、この事件は、教皇インノケンティウス二世の在位期から教皇エウゲニウス三世の在位期にわたる大事件であった。[2] 本来ならば『書簡集』においてヨーク関係の計四通の書簡（書簡二三五、二三六、二三九、二四〇番）はまとめて配列されるはずであるが、事件の最中に教皇の交代が見られたため、このまとまりは、新教皇エウゲニウス即位を祝福する二通の書簡（書簡二三七、二三八番）によって二通ずつ分断される形となっている。[3] 従って我々は、『書簡集』の構成において、いかにサン＝ベルナールが教皇在位期を重視したかを知ることができよう。[4]

また同『書簡集』には、実に多くの名宛人が登場するが、『書簡集』の比較的最初の部分（書簡一三番以降）において、名宛人が教会ヒエラルキアに占める順位に従って、書簡が配列されている。即ち教皇ホノリウス二世宛書簡に始まり、枢機卿宛書簡、司教宛書簡、修道院長宛書簡、修道士宛書簡そして世俗の諸侯宛書簡といった具合に、ヒエラルキアを持した教会のあるべき姿、「教会の鑑」（speculum Ecclesiae）ともいうべきものが呈示されている。こうしたヒエラルキア順は、さほど明確に示されてはいないにせよ、他の箇所にも繰り返し見られる。[5] そして『書簡集』全体においてサン＝ベルナールがいかに教会ヒエラルキアを重視したかを示す例として、同一人物が修道院長から司教になった場合を挙げることができる。例えば、時期的には逆転するにもかかわらず、当

該人物が司教として叙階された件について述べている書簡が、その者が修道院長であった時点に宛てた書簡よりも前に収められている場合がそれである。[6]

さらに『書簡集』全体を見渡すとき、サン＝ベルナールの関心、活動の舞台の漸次的拡大を追うことができる。サン＝ベルナールは修道院長である故、当然のことながら彼の生活の中心、そしてその第一の関心事は修道院である。『書簡集』の最初のテーマは修道生活であり、あの「ロベール宛書簡」を書簡一番として、書簡一二番までサン＝ベルナールの修道生活に関する理想が披瀝されることになる。そこでは特に、現実に修道会内で起こった修道士の逃亡事件や修道院長の職務放棄事件などに直面したサン＝ベルナールが、それらの解決法を模索しながら、修道院長職の理想のあり方を提示し、理想的修道院としてのシトー修道会の讃美を行っていることなどが見て取れる。[7] 次いでその関心は、フランス王国を中心に、司教座教会へと向けられていく。ここでも『書簡集』の意図的な構成が見られる。まずサン＝ベルナールは、サンス大司教宛書簡四二番、マビョンによって「司教の品行と義務について」〈De moribus et officio episcoporum〉と題された、論文とも呼び得る長い書簡において、彼の司教観ともいうべきものを披瀝し、理想的司教としてサンス大司教教化を試みた後、同大司教及びパリ司教が巻き込まれる司教座教会改革闘争へ、彼らを擁護する立場で介入していく（書簡四五―五一番）、という構成になっている。[8] こうして一旦外へ向けられた彼の視線は、彼をしてシトー修道会以外の修道院の諸問題への介入へと駆り立て（書簡五三番以降）、さらに、イングランドで後に大発展を遂げる娘修道院、リーヴォー、ファウンテンズの設立に至る（書簡九二番以降）。やがて彼がその活動の舞台を西欧全体に広げる時が来る。アナクレトゥスのシスマの始まりである（書簡一二四番以降）。シスマの間、一貫して教皇インノケンティウス二世擁護の立場を堅持していたサン＝ベルナールは、同教皇に与しないアキテーヌ地方やイタリアの諸勢力を懐柔しようとし、またイングランド王、ドイツ皇帝に対して、インノケンティウス派のために援助を求めている。[9] この間ドイツ、イ

タリアへとその文通相手の幅も広がり、シスマが終結する頃には、ローマにとってサン＝ベルナールの存在は無視できないものとなっていた。かくして一一四五年、サン＝ベルナールの弟子が教皇エウゲニウス三世として即位することになる（書簡二三七、二三八番）。

他方において彼とローマとの関係の変遷も、各教皇在位期間内に書かれた教皇宛て及びローマ宛書簡数から見て取れる。教皇宛書簡数は、教皇ケレスティヌス二世の短い在位期間を除くと、シスマを機に一気に増大し、それ以前の教皇ホノリウス二世宛書簡が六通にとどまっているのに対し、教皇インノケンティウス二世宛書簡が三四通、エウゲニウス三世宛書簡も三四通となっている。教皇宛以外のローマ宛書簡に関しては、より複雑な状況を呈している。ローマ宛書簡数は、確かにホノリウスの治世に比べて、シスマ以後増大したとはいえ、インノケンティウスの治世におけるよりも次代のエウゲニウスの治世における方が少ない。これには、教皇庁の文書局長エメリック（Haiméric、一一四八年没）とサン＝ベルナールとの親交が関係しており、エメリックの死がローマとサン＝ベルナールとの関係に微妙な変化をもたらしたと考えられるが、ローマ宛書簡の多くがエメリック宛であったこともそれを裏付けているのではなかろうか。[10]

これらの変動的な書簡の構成要素の中にあって、一貫して変わらぬ重要性を持ち続けている要素、それは修道生活である。このテーマは、サン＝ベルナールが修道院の外に目を向け、教会の「一大事」に精力的に介入した後で、必ず戻ってくるところのものである。パリ・サンス司教座教会改革に介入した後も、シトー派以外の修道院改革、娘修道院の設立、俗人や聖職者に対する修道生活の勧めなどが彼の大きな関心事となる（書簡五三番以降）。また、アナクレトゥスのシスマに忙殺されている間も、彼はクレルヴォー修道士たちのこと、修道院のことを心配し（書簡一四一―一四九番）、彼の「雅歌に関する説教」の誕生に行き着く瞑想の生活に思いを馳せている（書簡一五三、一五四番）。[11] 他方において、『書簡集』の最初に修道生活関係書簡が置かれていることは、単にク

ロノロジー的配慮からだけではなく、サン＝ベルナール及び編纂者たちが修道生活に与えた優位性を示していると思われる。[12]

『書簡集』の最後には、サン＝ベルナールの生涯のしめくくりとなる書簡が来る。ボヌヴァル修道院長アルノー（Arnaud de Bonneval、一一五六年没）宛書簡で、病の床についたサン＝ベルナールは、自らの死期が近いことを告げている。当然この書簡は、サン＝ベルナールの死後に編纂された『書簡集』に、初めて収められることになった。[13]

このように『サン＝ベルナール書簡集』の構成を瞥見しただけで、それが無作為に選択された書簡の単なる寄せ集めではないことがわかる。その構成は、大きな流れから見た場合は、サン＝ベルナールの活動範囲がシトー修道会に限られていた時期から死の直前に至るまでの半生を、その活動範囲の拡大と共に追うことができるようになっており、一種の「サン＝ベルナール伝」を作り上げている。しかしその半生は、書簡の単純なクロノロジー的配列によって語られてはおらず、幾つかの重要な要素によってクロノロジーの厳密さが意図的に破られている。それは、教皇在位期、教会ヒエラルキア、修道生活の三要素である。そしてとりわけサン＝ベルナールが重視したのは修道生活であり、それに対する「気遣い」は、繰り返し見られる。要するに『サン＝ベルナール書簡集』は、サン＝ベルナール自身をも含めた編纂者たちの明確なプログラムに則った文学的作品といえよう。

おわりに

以上のような構成を持ち、作為的、文学的作品ともとれるような『サン＝ベルナール書簡集』から、どのようにして、より実態に近いサン＝ベルナール像に迫ることができるのであろうか。サン＝ベルナールは、自らを評して次のように述べている。

「化け物のような私の生活、惨めさに押しつぶされた私の良心は、あなた［＝ベルナール・ド・ポルト］に大声で訴えかける。実際私は、現代のキマイラのようなものだ。聖職者であることもできなければ、俗人であることもできない。というのも私は、修道士の外観を保ちつつも、既に長いこと修道士の本分を捨て去ってしまっているからだ。私は私について、あなたが他の人々から聞いたと思われることを書こうと思わないし、私が何をしているのか、何に精を出しているのか、どんな危険を冒してこの世に舞い戻ってきたのか、いやむしろどんな深淵を通ってこの世に投げ込まれたのかを書こうと思わない。もし未だ聞いていないならば、尋ねてみるようお願いする。そしてあなたが聞いたことから判断して、助言と、祈りによる支えとを下さるように」（書簡二五〇番）[14]。

この言葉は、サン＝ベルナールがまさに彼の時代にあって自らの居心地の悪さを感じていることを、見事に表現している。修道士という身分であり、修道生活こそこの世にいながら最大限に救済に近い道であると考え、人にもそれを奨励しながらも、自らは絶えず外の世界へと呼び出され、その修道院長在位期間のほとんどを修道院外での活動に費し、全教会への奉仕を強いられている。サン＝ベルナールはこうした自分を、顔が獅子、胴が山羊、尾が蛇であるギリシャ神話の怪物キマイラにたとえたのである。

彼は、西欧キリスト教世界における自らの重要性を認識しており、他方では彼の修道院外での活動に対する批判が存在することも意識していた[15]。『書簡集』のクロノロジー的整然さをしばしば乱してまで、教会への奉仕の間に挿入され、繰り返しなされた修道生活というテーマへの回帰は、世間の批判に対する彼の釈明とも解釈し得るし、また現実にかなわなかったことを、自伝の中で繰り返し実現させているとも受け取れよう。いずれにせよこうした修道生活と教会への奉仕をめぐる、彼の心の内と外における葛藤が、彼の半生にわたる諸活動を背景に、『書簡集』の中に見て取れるのではないか。また、彼自らが書簡を選択し、それに加筆修正を施した『書簡集』の中で、彼は思想的にキマイラ状態を克服し、居心地の悪さを払拭しようと務めたのではないだろうか[16]。

様々な事件に直面しつつ、現実に様々な経験を積みながら、修道生活と教会への奉仕、この二つの要素を、サン＝ベルナールは彼の思想の中でどのように融合していったか。これを跡付けるためには『サン＝ベルナール書簡集』の考察こそが有用であろう。なぜならば『サン＝ベルナール書簡集』は、一二世紀前半期のキリスト教世界の修道院、教会に関する様々な事件を記しており、それに直面したサン＝ベルナールの実際の行動をも知らせてくれる故、そこから「行動の人サン＝ベルナール」を跡付けることができるからである。また『書簡集』は、そのときどきの彼の行動原理、行動の動機を故意に、あるいは偶然に知らせてくれる場合もあり、ときとして壮大なスケールの思想をも披瀝してくれる故、そこから「思考する人サン＝ベルナール」の理想、思想を跡付けることができるからである。そしてこれこそが『書簡集』の最大の利点であるが、現実に様々な経験を積み、省察し終えた後で再びサン＝ベルナールがその『書簡集』において自らの半生を振り返って、意図的に何らかのメッセージを残そうとした故、そこから彼自身の確信、反省、後悔を読みとれ、そこからさらに、彼が受け入れられ、ないしは受け入れられなかった一二世紀前半のキリスト教世界像もまた浮かび上がってくると思われるからである。『書簡集』こそが、従来の大雑把なサン＝ベルナールのイメージ、即ち一二世紀西欧キリスト教世界に強大な影響力を行使したサン＝ベルナールというイメージからより現実近くに引き戻された、具体的なサン＝ベルナール像を浮かび上がらせてくれるはずなのである。

『サン＝ベルナール書簡集』を一つの作品として総体的に、且つ体系的に読み解くこと、これもまた歴史家にとって重要なことなのである。

〔註〕

(1) ただし、在位期間が短かった教皇ルキウス二世（Lucius II、一一四四―一一四五年）宛書簡は見られない。

(2) この事件は、D. Knowles, The Case of St William of York, *The Historian and Character and Other Essays*, Cambridge, 1964, pp. 76-97 に詳述されている。

(3) *SBO.*, vol. 8, pp. 108–124.

(4) Leclercq, Recherches..., p. 215.

(5) Ibid., pp. 214–216.

(6) 例えば書簡一四一、一三五四番。*SBO.*, vol. 7, pp. 340f., vol. 8, pp. 156–160.

(7) *SBO.*, vol. 7, pp. 1–62.

(8) *Ibid.*, pp. 100–143.

(9) *Ibid.*, pp. 305–337.

(10) 教皇ホノリウス二世及びインノケンティウス二世在位期の枢機卿宛書簡のうち、約半数近くがエメリック宛である。

(11) *Ibid.*, pp. 338–353, 359–361.

(12) Leclercq, Recherches..., p. 215.

(13) この書簡二一〇番は偽造されたものと考えられている。名宛人のボヌヴァル修道院長アルノーは、サン＝ベルナールがその最期の床につきながらそのために書簡を口述するほどサン＝ベルナールと親しい間柄ではなく、他方において、瀕死のサン＝ベルナールが書簡を口述するほど気力と体力とを持ち合わせていたことについても疑わしいからである。この書簡はサン＝ベルナールの死後の『書簡集』再編段階で、二つの理由から偽造されたと考えられている。第一に『書簡集』に文学的完結性を持たせるためであり、第二に『サン＝ベルナール伝』の作者の一人であるアルノーの信頼度を高めるためである。Leclercq, histoire ou..., pp. 3f.; Bredero, *Etudes*..., pp. 109–111; id., Canonization, p.81.

(14) "Clamat ad vos mea monstruosa vita, mea aerumnosa conscientia. Ego enim quaedam Chimaera mei saeculi, nec clericum gero nec laicum. Nam monachi iamdudum exui conversationem, non habitum. Nolo scribere de me quod vos per alios audisse existimo, quid actitem, quid studeam, per quae discrimina verser in mundo, immo per quae iacter praecipitia. Si quominus audistis, precor ut inquiratis et, secundum quod audieritis, et consilium impendatis, et orationum suffragia." (Ep. 250, *SBO.*, vol. 8, p. 147.)

(15) サン＝ベルナールは、一一二〇年代の末頃に、パリ・サンス司教座教会改革をめぐる司教たちとフランス王ルイ六世との争いに介入した際、教皇庁の文書局長エメリックによって、修道士の使命からかけ離れた彼の行動を非難された。それに対してサン＝ベルナールは、今後教皇や司教の命令がない限り、修道院の外には出ないと誓っている。cf. Ep.48, *SBO.*, vol. 7, pp. 137–140.

(16) J・R・サマーフェルトは、修道士の活動領域と修道院外での教会への奉仕という二つの要素を、サン＝ベルナールがいかに定義し、いかに両者を融合しようとしたかを、サン＝ベルナールの書簡から読み取り、それを高い権威への服従の義務と慈愛（カリタス）という観点から論じている。J. R. Sommerfeldt, The Chimaera Revisited, *Cîteaux*, 38 (1987), pp. 5–13. また、『サン＝ベルナール書簡集』を、ルクレールのマニュスクリ研究の成果を取り入れて一つの作品として扱っている研究としては、G. L. J. Smerillo, Caritas in the Initial Letters of Saint Bernard, *Saint Bernard of Clairvaux. Studies Commemorating the Eighth Centenary of His Canonization*, Kalamazoo (Michigan), 1977, pp. 118–136 がある。スメリロは、書簡一番から書簡二一番までが《corpus epistolarum》の序文というべきものを構成しており、その部分にサン＝ベルナールの教会学上の重要な概念、カリタスが明示されていると考えており、このカリタスこそが、修道生活及び教会に関する様々な事件に直面したサン＝ベルナールを、行動へと駆り立てたものであると述べている。

《corpus epistolarum》の目次

（*SBO.*, VII, VIIIによる。作成年も同書による。）

——教皇の治世・その他《corpus epistolarum》を構成する主要要素

……主だった事件・特記すべき事柄

書簡番号	／	名宛人	修道生活について	／	作成年
一		シトー修道会を去りクリュニー修道院に入った従兄弟のロベールへ			一一二五
二		後にラングルの大助祭になったフルク青年へ			一一二〇
三		ある律修参事会員たちへ			一一二〇

四　モリモン修道院長アルノーへ　一一二四
五　［モリモン］修道士アダムへ　一一二四
六　ケルンのブルーノへ　一一二四／二五
七　修道士アダムへ　一一二五
八　ケルンのブルーノへ　一一三一
九　今やケルン大司教になったブルーノへ　一一三二
一〇　ケルン大司教ブルーノへ　一一三二―三七
一一、一二　シャルトルーズ修道士たちとその修道院長ギグへ　一一二四／二五、一一三三

教皇ホノリウス二世の治世

教会ヒエラルキア順に

一三、一四　教皇ホノリウス二世へ　一一二六、一一二六―二九
一五　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一二七
一六　司祭枢機卿ピエールへ　一一二七
一七、一八、一九　助祭枢機卿ピエールへ　一一二六、一一二六、一一二六／二七
二〇　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一二六―二八
二一　教皇特使マチューへ　一一二八
二二　リヨン大司教にして教皇特使フンバルトへ　一一二六―二八
二三　トロワ司教アトンへ　一一二四―三二
二四　ロンドン司教マギステル・ギルバートへ　一一二八―三四
二五　ルーアン大司教ユーグへ　一一三〇―三二
二六　ローザンヌ司教ギィへ　一一二九／三〇
二七　ジュネーヴ被選司教アルドゥシウスへ　一一三五／三六
二八　ジュネーヴ司教アルドゥシウスへ　一一三六

二九　メッス司教エティエンヌへ　一一二〇―三五
三〇　メッス司教座のプリミケリウス・アルベロンへ　一一二四―三一
三一　テンプル騎士修道士になったシャンパーニュ伯ユーグへ　一一二五
三二　サン＝ニケーズ・ド・ランス修道院長へ　一一二四―二七
三三　ポンティニー修道院長ユーグへ　一一二四―二七
三四　修道士ドロゴンへ　一一二四―二七
三五、三六　マギステル・ユーグ・ファルジへ　一一二四―二七
三七、三八　シャンパーニュ伯チボーへ　一一二四、一一二五
三九、四〇、四一　シャンパーニュ伯チボーへ　一一二七

クレルヴォーから外へ

（サン＝ベルナールが様々な事件に介入し始める）
四二　サンス大司教アンリへ（「司教の品行と義務について」）　一一二七／二八
四三、四四　サンス大司教アンリへ　一一二七／二八、一一二八

パリ・サンス教会改革をめぐって

四五　フランス王ルイ六世へ　一一二九
四六　教皇ホノリウス二世へ　一一二九
四七　教皇ホノリウス二世へ（シャルトル司教ジョフロワに代わって）　一一二九
四八　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一三〇
四九　サンス大司教アンリを擁護するために教皇ホノリウス二世へ　一一二九／三〇
五〇　教皇ホノリウス二世へ　一一二九／三〇
五一　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一二八
五二　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一二八

修道院の利害擁護・修道院問題への介入

五三、五四　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一二八、一一三六
五五、五六、五七　シャルトル司教ジョフロワへ　一一二七、一一二四、一一二七
五八　シャロン＝シュル＝マルヌ司教エブルへ　一一二六
五九、六〇　ラングル司教ヴィランへ　一一二六、一一二五―三五
六一　トゥール（Toul）司教リカンへ　一一二六
六二、六三　ヴェルダン司教アンリへ　一一二九、一一二八
六四　リンカーン司教アレクサンダーへ　一一二九
六五　アンシャン修道院長アルヴィズへ　一一三一
六六　サン＝メダール・ド・ソワソン修道院長ジョフロワへ　一一三一
六七、六八　サン＝ジェルメ・ド・フリィ修道士たちへ　一一二〇―二六、一一二五―二六
六九、七〇　トロワ＝フォンテーヌ修道院長ギィへ　一一二九―三三、一一二八―三三
七一　トロワ＝フォンテーヌ修道士たちへ　一一二七―一一三三
七二、七三、七四　フォワニー修道院長ルノーへ　一一二一、一一二三／二三、一一二五―三一
七五、七六　プリュイ修道院長アルトーへ　一一二七―二九、？
七七　サン＝ヴィクトール修道院長マギステル・ユーグへ（「洗礼について」）　一一二七／二八
七八　サン＝ドニ修道院長シュジェへ　一一二七
七九　修道院長リュックへ　一一二四―三五
八〇　モレーム修道院長ギィへ　一一三二
八一　ポティエール修道院長ジェラールへ　一一三〇
八二　サン＝ジャン・ド・シャルトル修道院長へ　一一二七／二八
八三、八四　サン＝ニコラ修道院長シモンへ　一一二一、一一二五
八四（bis）、八五、八六　サン＝ティエリ修道院長ギョームへ　一一二五、一一二三／二四

八七、八八、八九、九〇　律修参事会員オジェへ　一一三九／四〇、一一二〇―二五、一一二四
九一　ソワソンに集まった修道院長たちへ　一一三〇

イングランドに娘修道院を設立

九二　イングランド王ヘンリー一世へ　一一三二
九三　ウィンチェスター司教ヘンリーへ　一一三三
九四　ヨークの［セント＝メアリー］修道院長へ（同修道院から副修道院長と数名の修道士たちが［ファウンテンズ修道院へ］移った）　一一三三
九五　ヨーク大司教へ　一一三三
九六　ファウンテンズ修道院長リチャードと彼の仲間たちへ（彼らは他の修道会からファウンテンズへ移った）　一一三三

九七　ブルゴーニュ伯コンラートへ　一一三二
九八　マカベア家について（名宛人不詳）　一一三二―三七
九九　ある修道士へ　？
一〇〇　ある司教へ　？
一〇一　ある修道士たちへ　？
一〇二　ある修道院長へ　一一五一

修道生活の勧め

一〇三　クレルヴォー修道士ギヨームの兄弟へ　一一三一
一〇四　マギステル・ワルターへ　？
一〇五　教皇庁の副助祭ロマーノへ　？
一〇六　マギステル・ヘンリー・マードックへ　一一二五
一〇七　バンベルク司教座聖堂参事会長（praepositus）トーマスへ　一一三一
一〇八　サン＝トメールのトマへ（修道生活に入る約束を破ったので）　一一三八―四五

一〇九　ペロンヌのジョフロワ青年とその仲間たちへ　一一三一
一一〇　ペロンヌのジョフロワの両親への慰めの言葉　一一三一
一一一　修道士エリに代って彼の両親へ　？
一一二　リジュのジョフロワへ　？

女性に対する助言

一一三　処女ソフィーへ　？
一一四　ある聖なる修道女へ　？
一一五　ノートル＝ダム・ド・トロワ修道院のある聖なる修道女へ　？
一一六、一一七　ブルターニュ伯妃エルマンガルドへ　一一三五
一一八　高貴で敬虔なる婦人ベアトリスへ　一一一八／一九
一一九　ロレーヌ公夫妻へ　一一三九
一二〇　ロレーヌ公妃へ　一一三九
一二一　ブルゴーニュ公妃へ　一一二〇

一二二　トゥール大司教イルドベールからサン＝ベルナールへ　一一三〇
一二三　トゥール大司教イルドベールへの返書　一一三〇

アナクレトゥスのシスマの始まり

一二四　教皇インノケンティウス二世を未だ承認しないトゥール大司教イルドベールへ　一一三一
一二五　マギステル・ジョフロワ・ド・ルルーへ　一一三一／三二
一二六　ジェラール・ダングレーム糾弾のためにアキテーヌの司教たちへ　一一三一／三二
一二七　ブルゴーニュ公に代って（ポワティエ伯ギヨームへ）　一一三二
一二八　ポワティエ伯ギヨームへ　一一三一／三二
一二九　ジェノヴァの人々へ　一一三四

一三〇　ピサの人々へ　一一三五
一三一　ミラノの人々へ　一一三五
一三二　ミラノの聖職者たちへ　一一三五
一三三　ミラノの全市民へ　一一三五
一三四　〔最近〕修道生活に入ったミラノの人々へ　一一三五
一三五　パヴィアの司教ピエールへ　一一三五
一三六　教皇インノケンティウス二世へ　一一三四
一三七　ローマ人たちの皇妃（ドイツ皇妃）へ　一一三五
一三八　イングランド王ヘンリー一世へ　一一三三
一三九、一四〇　皇帝ロタールへ　一一三五

シスマへの介入期間における修道生活への配慮

一四一　修道院長職を辞任したイニー修道院長フンベルトへ　一一三七
一四二　オルプ修道士たちへ　一一三八
一四三、一四四　クレルヴォー修道士たちへ　一一三七
一四五　シトーに集まった修道院長たちへ　一一三七
一四六　バレルヌ修道院長ビュルシャールへ　一一三六
一四七、一四八、一四九　クリュニー修道院長ピエールへ　一一三八

教皇インノケンティウス二世の治世

一五〇　教皇インノケンティウス二世へ　一一三三
一五一　トゥール被選大司教フィリップへ　一一三三
一五二　トロワ司教擁護のために教皇インノケンティウス二世へ　一一三五
一五三、一五四　シャルトルーズ修道会のベルナール・ド・ポルトへ　一一三六
一五五　司教に選出されたベルナール・ド・ポルトのためを思って教皇インノケンティウス二世へ　一一三六

一一三五、

一五六　オルレアン司教座の聖職者たちのために教皇インノケンティウス二世へ　一一三四／三五
一五七　オルレアン司教座の聖職者たちのために教皇庁の文書局長エメリックへ　一一三五

パリ教会改革

一五八　サン＝ヴィクトール・ド・パリの副修道院長トマ殺害について教皇インノケンティウス二世へ　一一三三
一五九　パリ司教エチエンヌに代って教皇インノケンティウス二世へ　一一三三
一六〇　パリ司教エチエンヌに代って教皇庁の文書局長エメリックへ　一一三三
一六一　教皇インノケンティウス二世へ　一一三三
一六二　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一三三
一六三　司祭枢機卿クレモナのジャンへ　一一三三

ラングル司教選挙事件

一六四　ラングル司教座教会の件についてインノケンティウス二世へ　一一三八
一六五　リヨン大司教座聖堂参事会長（decanus）フルクと同教会の財産管理人（thesaurarius）ギィへ　一一三八
一六六、一六七　教皇インノケンティウス二世へ　一一三八
一六八　ローマ教皇庁の司教枢機卿たちへ　一一三八
一六九　教皇インノケンティウス二世へ　一一三八
一七〇　フランス王ルイ七世へ　一一三八／三九
一七一　リヨン大司教フルクのために教皇インノケンティウス二世へ　一一三九
一七二　ラングル司教ジョフロワに代って教皇インノケンティウス二世へ　一一三九
一七三　リヨン大司教フルクへ　一一三九
一七四　聖母マリアの受胎についてリヨン大司教座聖堂参事会員たちへ　一一三八―四〇
一七五　エルサレムの総大主教へ　一一三〇／三一
一七六、一七七　トリア大司教アルベロンに代って教皇インノケンティウス二世へ　一一三五、一一三九

一七八　教皇インノケンティウス二世へ　一一三六
一七九、一八〇　トリア大司教アルベロン擁護のため教皇インノケンティウス二世へ　一一四〇
一八一　教皇庁の文書局長エメリックへ　一一三六
一八二　サンス大司教アンリへ　一一三六―三九
一八三　ローマ人たちの王（ドイツ王）コンラート三世へ　一一三九
一八四　教皇インノケンティウス二世へ　一一四〇
一八五　ヴァランス司教位に不当についているユスタッシュへ　一一三八
一八六　城主の息子シモンへ　一一四〇

ピエール・アベラール事件

一八七　サンスに招集される司教たちへピエール・アベラール糾弾　一一四〇
一八八　ローマ教皇庁の司教枢機卿たちへ　一一四〇
一八九　教皇インノケンティウス二世へ　一一四〇
一九〇　教皇インノケンティウス二世へ（「ピエール・アベラールの邪説駁論」）　一一四〇
一九一　ランス大司教に代って教皇インノケンティウス二世へ　一一四〇
一九二　かつてピエール・アベラールの弟子でありそれ故最も重要であり後に教皇ケレスティヌス二世となったカステロのマギステル・ギィへ　一一四〇
一九三　枢機卿マギステル・イヴへピエール・アベラールの件について　一一四〇
一九四　ピエール・アベラールの邪説に対する教皇インノケンティウス二世の文書　一一四〇／四一
一九五　コンスタンツ司教へアルノルド・ダ・ブレッシアについて　一一四二
一九六　教皇特使ギィへ　一一四二／四三
一九七　ブザンソン大司教座聖堂参事会長（decanus）ピエールへ　一一四一
一九八、一九九　教皇インノケンティウス二世へ　一一四一

二〇〇　アンジェ司教マギステル・ウルジェへ彼とフォントブロー修道院長の紛争解決のために　一一四〇―四三
二〇一　リエーティにある修道院の修道院長ボードゥアンへ　一一三六―四〇
二〇二　サンス大司教座の聖職者たちへ　一一四二
二〇三　トロワ司教と同司教座の聖職者たちへ　一一四〇
二〇四　サン＝トーバン修道院長へ　一一四〇
二〇五　ロチェスター司教へ　一一四二
二〇六　エルサレム王妃へ　？
二〇七、二〇八、二〇九　シチリア王ロジェへ　一一三九、一一四〇／四一、一一四一
二一〇、二一一、二一二　教皇インノケンティウス二世へ　一一四〇―四三、一一四二、？
二一三、二一四、二一五　教皇インノケンティウス二世へ　一一三九、一一四〇、一一四〇

ブールジュ大司教選挙事件

二一六　ヴェルマンドワ伯ラウルとその妻について教皇インノケンティウス二世へ　一一四二
二一七、二一八　教皇インノケンティウス二世へ　一一四三
二一九　三名の司教枢機卿オスティアのアルベリック、パレストリーナのエチエンヌ、トゥスクルムのイマールと教皇庁の文書局長ジェラールへ　一一四三
二二〇　フランス王ルイ七世へ（ヴェルマンドワ伯ラウルについて）　一一四三
二二一　フランス王ルイ七世へ　一一四三
二二二　ソワソン司教ジョスランとサン＝ドニ修道院長シュジェへ　一一四三
二二三　サン＝ベルナールの書簡に厳しい返書を送ったソワソン司教へ　一一四三
二二四　パレストリーナの司教枢機卿エチエンヌへ　一一四二―四四
二二五　ソワソン司教へ　一一四三／四四
二二六　フランス王ルイ七世へ　一一四四

二二七　ソワソン司教へ　一一四三
二二八　書簡を送らないことで不平を漏らしたクリュニー修道院長ピエールへ　一一四三
二二九　クリュニー修道院長ピエールの返書　一一四三
二三〇　オスティア、トゥスクルム、パレストリーナの司教枢機卿たちへ　一一四二―四四
二三一　オスティア、トゥスクルム、パレストリーナの司教枢機卿たちへラニー修道院長のために　一一四二―四四
二三二　オスティア、トゥスクルム、パレストリーナの司教枢機卿たちへ　一一四二―四四
二三三　自らの修道院を去り孤独の生活を選んだビュゼ修道院長ジャンへ　一一四一―四五
二三四　サン＝テチエンヌ・ド・ディジョン修道院長エルベールへ　一一二五

教皇ケレスティヌス二世の治世

二三五　教皇ケレスティヌス二世へヨークの不当就任司教について　一一四三
二三六　教皇庁のすべての人々へ　一一四三

教皇エウゲニウス三世の治世の始まり

二三七　サン＝タナスタージオ修道院長を教皇エウゲニウス三世として選出した時にローマ教皇庁のすべての人々へ　一一四五
二三八　教皇エウゲニウス三世へ第一書簡　一一四五
二三九　教皇エウゲニウス三世へヨークの不当就任司教について　一一四五
二四〇　教皇エウゲニウス三世へ（前書簡と同じ件について）　一一四五／四六

異端について

二四一　サン＝ジル伯（トゥールーズ伯）アルフォンスへ異端アンリについて　一一四五
二四二　帰郷後トゥールーズの人々へ　一一四五
二四三　教皇エウゲニウス三世に離反したローマの人々へ　一一四六
二四四　ローマ人たちの王（ドイツ王）コンラート三世へ　一一四四

様々な司教・司教座について

二四五　教皇エウゲニウス三世へオルレアン司教のために　一一四五／四六
二四六　オルレアン司教が罷免された時彼のためを思って教皇エウゲニウス三世へ　一一四六
二四七、二四八、二四九　教皇エウゲニウス三世へ　一一四六
二五〇　ベルナール・ド・ポルトへ　一一四七—五〇
二五一　教皇エウゲニウス三世へ　一一四七
二五二　教皇エウゲニウス三世へヨーク大司教座の件について　一一四五／四六

様々な修道院について

二五三　プレモントレ修道院長へ　一一五〇
二五四　オルブ修道院長ゲランへ　一一三六
二五五　フランス王ルイ六世へ　一一三五
二五六　教皇エウゲニウス三世へ　一一五〇
二五七　教皇エウゲニウス三世へ修道士フィリップのために　一一四六—五〇
二五八　教皇エウゲニウス三世へ修道士リュアランのために　一一四五
二五九　教皇エウゲニウス三世へ　一一四五
二六〇　修道院長リュアランへ　一一四五
二六一　教皇エウゲニウス三世へ　？　？
二六二　教皇エウゲニウス三世へムゾン修道士たちのために　？
二六三　ソワソン司教へシェゼィー修道院長のために　一一四七
二六四　クリュニー修道院長ピエールからベルナールへ　一一五〇
二六五　クリュニー修道院長ピエールへの返書　一一五〇／五一
二六六　サン＝ドニ修道院長シュジェへ　一一五〇
二六七　クリュニー修道院長へ　一一四五
二六八、二六九、二七〇　教皇エウゲニウス三世へ　一一四八、？、一一五一

二七一　シャンパーニュ伯チボーへ　一一五一
二七二　ラン司教へ　一一五二
二七三　教皇エウゲニウス三世へ　一一五〇

オーセール司教選挙事件

二七四　ローマよりトロワ＝フォンテーヌ修道院長ユーグへ　一一五一
二七五　教皇エウゲニウス三世へオーセール司教選挙について　一一五二
二七六　オーセール司教の死後教皇エウゲニウス三世へ　一一五一／五二
二七七　教皇エウゲニウス三世へクリュニー修道院長のために　一一五一／五二
二七八　教皇エウゲニウス三世へボーヴェ司教のために　一一五〇
二七九　シャンパーニュ伯アンリへ　一一五二
二八〇　教皇エウゲニウス三世へオーセール司教選挙について　一一五二
二八一　キアラヴァレ修道院長ブルーノへ　一一五二
二八二　フランス王ルイ七世へオーセール司教選挙について　一一五二
二八三　教皇エウゲニウス三世へラ＝ミロワール修道士たちのために　一一五二
二八四　教皇エウゲニウス三世へランス大司教と他の人々のために　一一五一／五二
二八五、二八六　教皇エウゲニウス三世へサン＝ドニ修道院長ウドのために　一一五二／五三
二八七　オスティア司教枢機卿へサン＝ドニ修道院長ウドのために　一一五三
二八八　テンプル騎士修道士でベルナールの叔父アンドレへ　一一五三
二八九　エルサレム王妃へ　一一五三
二九〇　オスティア司教枢機卿へ枢機卿ジュルダンについて　一一五一／五二
二九一　教皇エウゲニウス三世へサン＝トワイヤン・ド・ジュ修道院のために　一一四五—五三
二九二　ある在俗聖職者へ　？

二九三　ピエール・ド・セルヘクレルヴォー修道院に移ったシェゼィー修道士のために　一一四七
二九四　教皇エウゲニウス三世ヘル＝マン司教のために　一一四三―五〇
二九五　枢機卿アンリヘル＝マン司教のために　一一四三―五〇
二九六　オスティア司教枢機卿ヘル＝マン司教のために　一一四三―五〇
二九七　モンティエラミ修道院長へ　？
二九八　教皇エウゲニウス三世へ　一一五二
二九九　アングレーム伯ヘサン＝タマン・ド・ボワ修道士たちのために　一一五〇
三〇〇　ブロワ伯妃へ　一一五二
三〇一　カスティリャ王妹サンチャへ　一一四九
三〇二　教皇特使たちヘマインツ大司教のために　一一五三
三〇三　フランス王ルイ七世へ　？
三〇四　サン＝ベルナールの健康を気遣ってくれたフランス王ルイ七世へ　一一五二／五三
三〇五　教皇エウゲニウス三世へ　一一五〇
三〇六　オスティア司教枢機卿ヘトロルドのトロワ＝フォンテーヌ修道院長選出について　一一五〇
三〇七　オスティア司教枢機卿へ　一一五〇／五一
三〇八　ポルトガル王アルフォンスへ　？
三〇九　教皇エウゲニウス三世ヘサン＝ドニ修道院長シュジェを称えて　一一五一

最期のサン＝ベルナール

三一〇　サン＝ベルナールに贈物をして彼の健康状態を気遣ってくれたボヌヴァル修道院長アルノーヘ　一一五三